

IV. 遺構・遺物

(1) 遺構 (Fig. 4)

本遺跡では狭範囲に縄文時代の集石炉が3基検出された。しかしいずれも発掘区境の壁にかかって検出されたため、拡張し完掘できたのは2号土塙一基であった。またそれらの内、周辺からは時期判定のできる遺物は出土しておらず、明確な時期判定はできていない。

1号集石炉、試掘時にK-6グリッド21の南東部の壁にかかりその一部を検出した。全容は把握できなかつたが、発掘以前に確認部分東側1m程のところに石柱を建てた際、掘り起された土中に多量の焼礫が認められているため、この遺構範囲は、その下あたりまで拡大するようである。

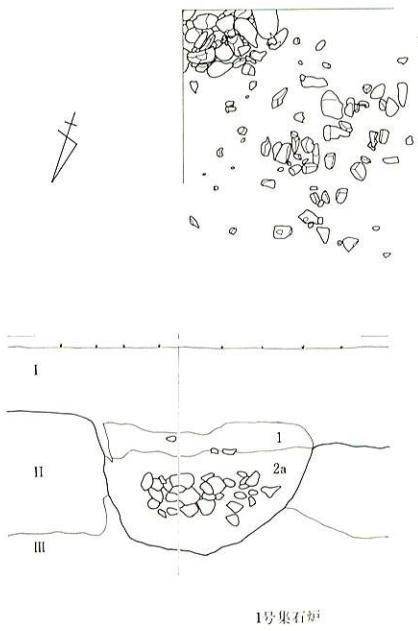
確認された部分においては、掘り込みはII層のなか程、表土から40cm位のところから始まる。壁の断面では深さが約40cm程であるが中心部はさらに少し深くなると思われる。土塙内には5cm前後から拳大程の碎礫を中心として、比較的大きな礫が集石され、そのほとんどは赤色化しており加熱されたようである。土塙内の覆土は大きく2つに分けられるが、上部の黒褐色土が下部に向かうに従い黒さを増していく。また壁面のなか程から下部にかけて焼土粒と炭化粒が多くなり底部には焼土粒と炭化粒が2~3cmの層を成していた。土塙周辺からも、多量の焼土粒、炭化粒が検出された。

この土塙の北西1m程の地点に集中をもつと思われる経1m程の礫の集中が存在したが、これも発掘壁にかかり全容を把握することができないため、これが土塙から独立した礫群なのか、土塙内の礫のひろがりなのかは確認できなかった。礫の集中と掘り込み面と思われる面はほぼ同一レベルにある。また土塙内からは他の遺物は検出されていない。

2号集石炉、試掘時にK-6グリッドの北面の壁に一部を確認した。北壁を1m程拡張し全容を表わした結果、中央部から北側にガス管が埋設されており、土塙上部北側が攪乱されていた。ガス管溝の北壁にはまだ多少の礫が残存していたが、土塙の端は確認できなかった。漸移層の幅がひろくセクションによる掘り込み面の確認は難しいが表土面より70cm、II層下面より掘り込まれているようである。集積された礫の上面はそれよりさらに15cm程深くなる。プランはほぼ円型で径は120cm、深さは確認面より60cmである。集石度は3基のうち一番密度が高く礫間がほとんどない。礫の大きさも拳大かそれ以上の碎礫である。上部から礫を除い

たところ、底部に20~25cm位の円礫による石囲いが認められた。これらの石は赤色化しているが同時にタール状の付着物で黒ずんでいる。それらの石の上部、土塙の側壁にそい木炭が3ヶ所に検出され、その最大のものは長さ40cm幅15cm厚さ10cm程のものである。石囲いに囲まれた部分には碎礫はなく、数ミリから1cm程の炭化粒が荒い黒色土と共につまっていた。発掘された範囲内ではこの土塙の周辺には礫の集中、ひろがりは認められなかった。

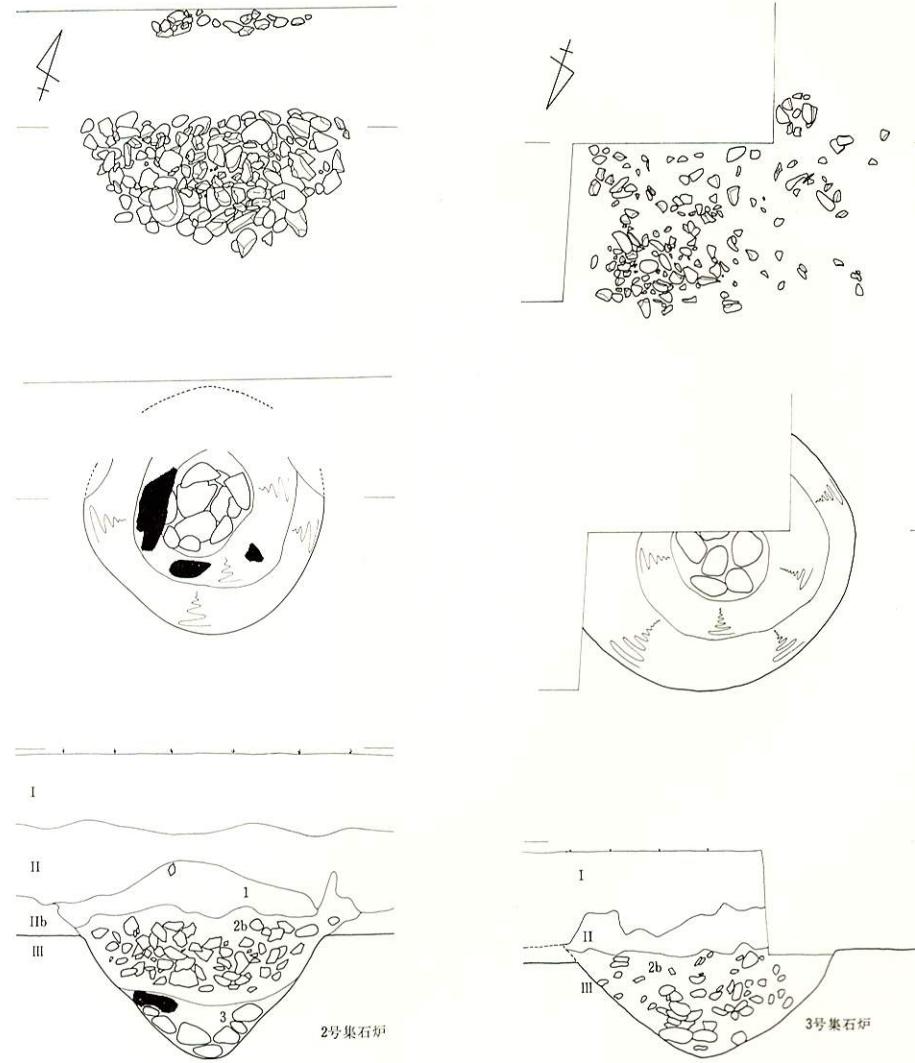
3号集石炉、L-6グリッド1とL-5グリッド5に検出された。円型のプランをもつ、この土塙も発掘区域外にかかっており、その上には構築物があるため完掘できなかった。覆土は一号集石炉に準じている。掘り込み面はセクションから推定すると表土から45cm前後、II層なか頃からはじまり一号集石炉とほぼ同一のレベル面をもつ。東側のわずかな部分に攢乱を受けているが、プランの確認のためには小規模なものであった。この土塙の集石は、2号に比べ、礫の大きさも小形で、集石度もやや粗密であり、一号に近い様相を呈している。2号の壁がかなり急傾斜であるのに対し3号はややゆるやかな傾斜をもつ、その形状に関連してか底部に存在する大形円礫も、石囲い的なものから敷石的な印象が強く与えられた。木炭は底部付近に、焼土粒と1~2cmの層を成している。他には親指大のものが数点壁側で検出されたにすぎない。この土塙の西側にも、かなりの広範囲で礫のひろがりが認められたがこれも土塙から独立しているのか、土塙内のひろがりかは確認できなかった。ただ土塙の周囲全体にひろがるようなものではなく、土塙の西側1.5m程のところに中心があると思われる。



- 1 茶褐色土
- 2a 暗褐色土
- 2b 暗褐色土(炭化物片を含む)
- 3 濃暗褐色土(大きい炭化物片を含む)

0 1m

Fig.4 集石炉



(2) 遺 物

本遺跡において出土した遺物は、約5,500点を数えるが、焼礫以外のものは少なく土器片は撲糸文、掘ノ内式土器が17点出土している。石器は石鎌が1点、打製石斧、梵字型石器、礫器、磨石、石皿等が50点程出土している。

グリッド0-4・5には、礫の集中があり規模は直径1m程度の集中部が認められ、その周辺に集中部より小さい礫が散在していた。土器と石器の出土状態は、ほぼ同一の範囲にまとまっており、K・L-4・5あたりに集中している。その集中箇所から東側には3基の土塙が分布し、付近からは土器、石器の出土がみられず、遺物と遺構の異った分布がみられる。

また発掘区外から、以前勝坂式土器片1点が発見されている。

(3) 落ち込み

本遺跡においては、L-7グリッドに落ち込みが一ヶ所確認された。この落ち込みは攪乱部分が大きく明確に遺構としての判断はできなかった。深さは確認された部分で地表面から150cm、プランは2m前後の楕円型と思われる、セクションによりII層上面から確認できた。

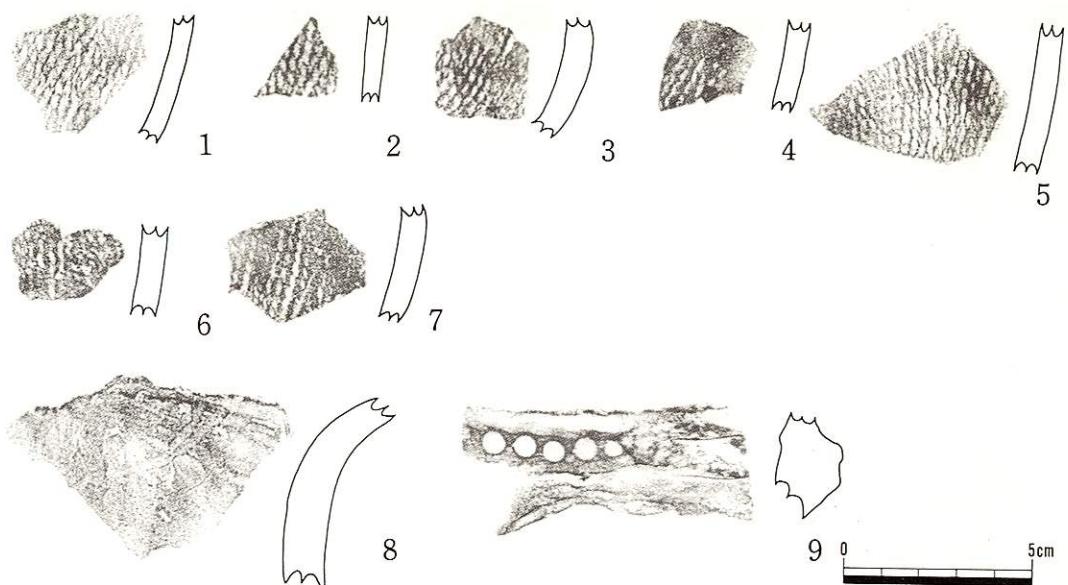
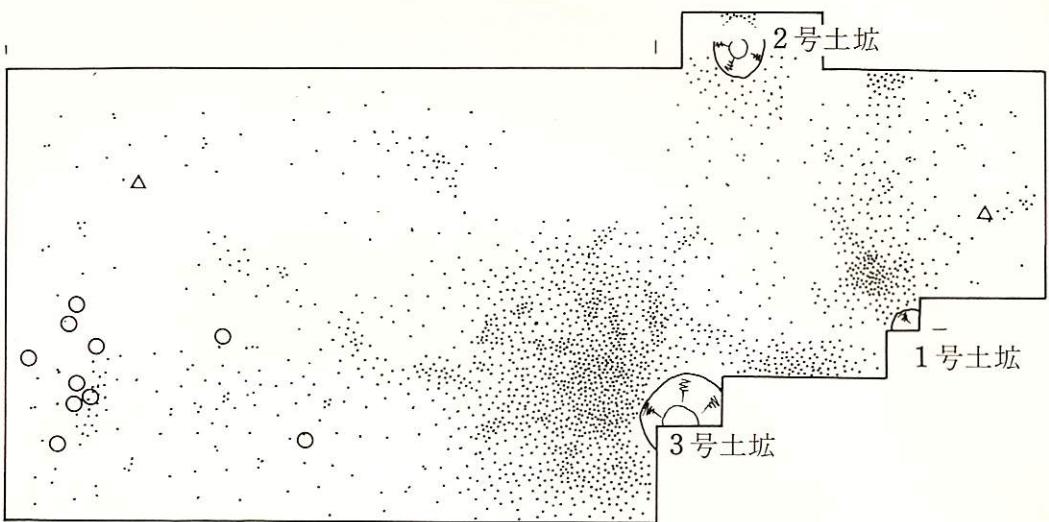


Fig. 5 出土土器



Fig. 6 出土石器



○ 土 器

△ 石 器

・ 碎 片



Fig. 7 遺物・遺構分布図(上: K~L-5~6, 下: 0-4~5)

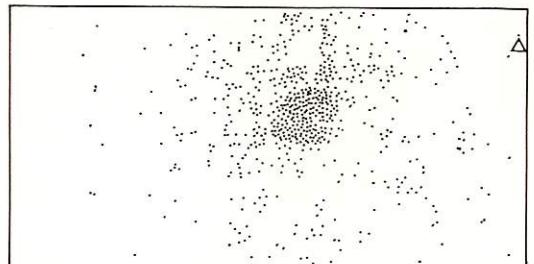




Fig. 8 遺物・遺構分布図